

松辺慶長は、夕飯は何かと楽しみにしながら帰路を辿っていた。町はどうに夕暮れに置いていかれ、夕闇にだいぶ沈みかけていた。西の空の隅に夕陽の残滓があるばかりである。

駅から自宅へと向かう人の姿は他にもいくつかあった。彼等彼女等の共通項はたったひとつだけだった。汗をかいている、ということだ。季節は夏で、ほとんどの人がその暑さに嫌気がさしていた。

労働者と学生——町を歩くのは主にその二種類の立場の人間だった。松辺は前者である。彼は町を行く人々の中でも五指に入る額の服をまとっている。オーダースーツにブランド物のワイシャツ、という格好だった。胸元にはしずかにかがやくブロンドのブローチがあった。それは彼にしては珍しく、自分で購入したのではなく、他者に買い与えられたものだった。慶長は他者に何かを与えられるという事を理由あって嫌悪していた。例外は姉からのプレゼントだけだった。彼にとつてそれは愛そのものだった。

居住地は駅から歩いて十分というところで、やがてそれが見えてきた。幼子を怖がらせてしまうには十分な真顔が弛緩する。ふっとゆるみ、おだやかな笑みがうかぶ。

二階建てのアパートには部屋が計六部屋ある。一階と二階に三部屋ずつ。慶長と姉の供花が借りているの二階に上がって一番手前の部屋だった。2LDKに二人で住んでいる。

「夕飯にかなー」

階段を上がりながら子供のようにつぶやく。ちょうど階段下の小窓を開けて用を足していた階下の住人はそれを聞いてつい笑った。階下の住人は自分の上の部屋に住んでいる姉弟とささやかな交流があった。強面の男がこどものようなことを言うの聞いて、彼女は我慢できなかった。

つぶやきを聞かれていることなど露ほども知らず、慶長は夕飯は何かと考える。昼は昨日の夕飯の残りの麻婆豆腐丼だった。だから、彼の舌は中華料理以外のものを求めていた。そういえば貰い物のにんにくがあると云っていたのを思い出した。それと中途半端な量の春キャベツが冷蔵庫に収まっていたことも。

供花のペロンチーノは絶品だった。市販のものを流用するではなく、しょうゆやオリーブオイルを適量用いてオリジナリテイを出し、当然乳化の過程を経て完成としていた。

弟は姉のペロンチーノが好物だった。一番の好物はオムライスだ。

階段を上り振り返る。西の空がまだ朱かった。そこで気付く。いつもは回っているはずの換気扇が回っていないことに。換気口は階段側にあり、慶長はいつもそこを見て姉の帰宅を知っていた。

慶長は正社員勤めだったが、供花は職に就いていなかった。しかし毎日一日中家にいるわけではなく、買い物その他、図書館に出かけたり、週三日ほど保護猫のボランティアに出ることがあった。しかしそれでも姉は弟より帰りが遅くなることはなく、もしそのようなことになる可能性があれば姉から弟に必ず連絡をした。

そういう日は換気扇が回っていないのが常だった。逆に言えば、連絡がない日は必ず換気扇が回っていた。それは慶長にしか知れない異常事態だった。

猫のような驚異的な瞬発力を以って、慶長は部屋のドアノブに手をかけた。それはじつに容易に動き、鍵がその動きを阻むことはなかった。鍵は、やはり閉まっていなかった。

あの姉が、そんなドジをするはずがなかった。予感はずかしく、予感はずかしく迫る。

「供花?!」

呼びながら玄関に飛び込む。暗い玄関には誰もいなかった。やけに静まり返っていた。普段通りであればキッチンからラジオが聞こえるはずだった。

見知らぬ革靴が雑に脱ぎ捨てられていた。見たことのない靴だった。慶長はそれを見て固まったが、どうにかというふうな動きで先の方を見た。リビングと玄関を隔てる扉は閉まっていた。スモークガラスの向こうは明るかった。しかし、なんの音も聞こえなかった。

呼吸と心臓の音がやけに大きく聞こえた。嫌な汗が、吹き出した。

土足で上がり、キッチンに駆け入った。

「あ——、おかえり、慶長」

松辺供花は殺害した実父の前で、そう言った。涙はとうに枯れ果てた後だった。

刺し傷は繋がりが、もはや穴となっていた。内臓はさながらスクランブルエッグと化して体外に流れ出ていた。慶長はこれまでに築いたすべてが崩れ去るよりも早く、どこかに逃げ出さなければ、と考えた。

四日後の昼、異臭に顔をしかめた階下の住人が慶長と供花の部屋を訪ねた。大家が合鍵を持って扉を開けたのはおやつ時だった。それから十三分後、パトカーが現場に到着した。

× × ×

慶長は必要と考えたものをまとめ、姉の手を引いて家を出た。親しくしていた階下の住人への申しわけなさを抱えたまま、父の車を探した。車の鍵は死体から拝借していた。彼は歩くことを父が毛嫌いすることをよく覚えていた。車は近くのパーキングに停めてあった。

車はレクサスからジムニーに変わっていたが、ナンバーは変わらずのままだった。

放心状態のままの姉を助手席に座らせ、慶長はナビを設定しないまま車を発進させた。

車は細道を抜け、県道に入り、国道に出た。約三十分、姉はびくりとも動かなかった。弟は何も訊かずに運転し続けた。やがて車が高速道路を走り始め、渋滞につかまったところになって、供花はぼつりと言葉をこぼした。

「いめんささこ」

「いいよ、べつに。気にしてない。とりあえず九州目指して走ろうと思うんだけど、どう？」

ラジオをつけると天気予報が流れた。しばらく晴れが続くらしい。

「きつといい景色が見れるよ」

ラジオの情報を元に慶長が言う。普段と何も変わらない声色だった。

供花はその冷静さに怒りを覚えた。理不尽だとは考えもしなかった。

「なんでそんな冷静なの?!?!」

「うお、どうしたそんな叫んで」

「どうした……? どうしたもこうしたもない!!」

「ずっと前から行こうって話してたところ巡れるんだぜ、楽しいこようよ」

「警察に通報してくれば私だけで済んだのに……!」

涙が落ちた。哀しみではなく、怒りがそうさせた。

「そうだ……今からでも遅くない……ケータイ貸して」

「……一応聞くけど、なんで」

「決まってる。自首する。そうすれば私だけで済む」

慶長は間を置かずに淡々と言葉を返した。

「あのさ、俺がそんなこと望んでると思ってるの?」

供花もまた、間を置かずに叫んだ。

「私が! 私が、慶長を巻き込むようなことを望むとでも、思っているの? そんなどうしようもない姉だと、弟を自分がしたことに巻き込んでも平気な顔してられる姉だと、本気で思っているの?」

姉弟の意見は真っ向から対立した。しかしどうしようもないほどに考え方は一致し、相手の気持ちは痛いほどに理解できた。互いが互いを想っていて、想われていると理解していた。

無言が続いた。車がトンネルに入り、車内が暗くなる。ラジオは消され、静か。

無言に耐えかねてか、供花が訊いた。

「私のケータイは」

「途中で捨てた」

「勝手に……そう、そっか」

「パーキング、寄って。トイレ行きたい」

「公衆電話から電話しようとか、周りに向かって叫ぼうと、考えないでくれよ」

「そんなことしないよ。財布だって持ってないんだから」

供花は本心とは真逆のことを思いながら、おくびにも出さず言っただけのけた。たしかに自分は財布を持っていなかった。しかし自分の造形よさに靡かない異性などほとんどいないことをよくよく理解していた。実父に欲情されるほどの美貌を嫌悪する彼女は、弟を救うためにそれを用いることにためらいはなかった。

何を言われても、意思を覆すつもりはなかった。

ゆるやかなスピードになった車はパーキングに入り、トイレに近いスペースに止められた。供花は飛び出すつもりでいた。

「頼むから、独りにしないでくれよ。信じてる」

一緒に出ようとするそぶりを見せないままにそう言われるまでは。

最愛の弟の懇願を前に、姉の固い決意と強かな覚悟は塵となって消え失せた。

「うん、わかった。大丈夫」

その言葉には新たな覚悟が備わっていた。

× × ×

松辺謙一郎は、ある時まで愛を甘受したことがなかった。彼が義務教育を迫える年齢まで生きることが出来たのは運がよかったとしか言いようがなかった。アイロンを押し付けられてできた生々しい火傷の跡は、その疑問をより深いものにする。彼の父と母には倫理観が欠如していた。

高校と大学には公的支援を受けて進学した。高校在学中までは娯楽に興じる余裕も暇もなかったが、最難関の国立大学に籍を置いてからはその限りではなくなった。しかし、常に張り詰めたまま生きてきた彼は学友を上手につくることができなかった。生真面目であり金と時間の重要性を年齢相応以上に理解していた彼は、睡眠と勉強と移動時間以外のほとんどすべての時間をアルバイトに費やした。

彼は自分が騒がしくしているのが苦手だったが、居酒屋やバーにひとりで赴いて周囲の喧騒に耳を肴に酒を飲むのはすきになった。ひとりで飲み屋街に繰り出し、ひとり静かに呑むことは読書に並ぶ数少ない趣味のひとつになった。ある日、謙一郎はもうずっと顔を合わせていない父がとんでもない酒豪だったことを思い出し、自身の酒への耐性を嫌悪したが、その時間を楽しむことができているのは耐性のおかげかと思うと複雑な想いが生まれた。そして皮肉なことに松辺謙一郎が安治華香に会えたのは強靱な臓器のおかげだった。

へべれけな状態で入ってきた女が同じ大学の同じ学科の人間だと彼がすぐに気付いたのは、図書館清掃のボランティア活動で顔を合わせて以降、学内で彼女を見かけるたびに目で追っていたからだだった。

謙一郎は酔いつぶれて寝てしまった華香に声をかけた。彼女は彼のことをしっかりと認識していた。学外で初めて話して以降、ふたりはぐっと距離を近づけた。彼は彼女のやさしさと笑顔と理知的なところに魅かれ、彼女は彼の内面にうかがえる薄暗さに魅かれた。

親しい友人から恋仲へと関係性が変わるまで一年を要したが、互いに向ける感情は関係がはじまった時点で『愛』と呼べるものだった。

感情の抜け落ちた顔しか見せなかった謙一郎に最初に愛を教え、また与えたのは華香だった。

その日、その瞬間から、自身のためだけに生きてきた謙一郎の生きる意味は彼女に成り代わった。

恨むものの存在しない死因で華香が物言わぬ死体になった日、謙一郎は壊れた。最愛の人を喪った結果発生した感情の矛先は、自身の子どもたちに向けられた。向けた矛先はいずれ返ってくるとも知っていたはずであるにもかかわらず、壊れた彼はそうしてしまった。

× × ×

九州に向かう途中に寄り道をしようという話になった。では、伊豆に、と言ったのは供花だった。弟は大いに賛同した。下田ではなく、富戸という大半の人にとっては馴染みない場所が目的地だった。

山道を走り、海沿いを走り、坂を走り、細道を走り、やがて車は「かみ風せん」という洋食屋に停車する。店は駐車場から階段を上った高いところにある。中年の夫婦のかたわれは店内から客が階段を上って来るのを見て、closeの看板をひっくり返した。店は夫婦のみで切り盛りしていた。

「いらっしやい、ひさしぶりね」

「覚えてくれてたんですか」

「うれしい」

姉弟は顔見知しりの女将さんの言葉に驚きと喜びを示す。

以前来たのはもう三年も前のことだった。

ふたりを迎えた女性も心底うれしそうにわらった。

「こちらこそ嬉しいわ、また来てくれて」

富戸にもそうだが、その店にふたりは何度も来たことがあった。思い出深い土地と店だった。

「お父さんとお母さんはお元氣かしら？」

店を姉弟に教えたのは謙一郎と華香だった。「かみ風せん」はそのふたりにとって想い出の店で、店を経営する夫婦にとってふたりは友人だった。

「はい、元氣ですよ。きつと」

供花が答えた。

「そう、よかった。会った時にでもよろしく伝えてね」

にこやかな表情にそのお願いは受け止められた。

海の幸、パエリア、風リゾットとミートソース、スパゲッティとミックスピザを注文した後、展望の良い窓辺の席に座ったふたりは黙って外を見た。その席は決まって家族で座っていた席だった。何を言うでもなくその席に案内されたふたりは、何を言うでもなく黙ってその席に着いていた。

「おまたせ」

ふたりは振り返る。料理を運んできたのは厨房内に引っ込んでいた大将だった。厨房内で水を流す音が聞こえた。女将は気を遣って自分の役割を夫に譲っていた。

「パエリアが慶長くんデパスタが供花ちゃんだったね。いつも」

大将の強面がゆるむ。旧知の友人の子どもに向けられる顔だった。

「そうです。大将も覚えてくれてたんですね」

「そりゃあね。友達の子どもだからね、君たちは」

やさしい笑顔にふたりの表情がすこし固くなる。

「今日はどうしたの。ふたりだけで」

「有給取って、久しぶりに姉弟だけで出かけてるんです」

「そうか。相変わらず仲良いね。姉弟の仲がいいっていうのはいいことだ」

笑ってそう言ったが、すぐになにか言いたげな表情になった。

「……………」

「あの、何か…?」

「ごめん。何かあったでしょ」

謝罪は踏み込むことへのものだった。大将は、友人の子どもたちに感じて仕方がない妙な違和感に、踏み込まざるを得なかった。

「いいえ、なにも? ああでも、強いて言うならいまちよつと父と仲違いしてるってぐらいです」  
すこし困った顔をつくってそう言う慶長の前で、供花は弟ほどに上手く感情を隠せなかった。

だから、その当人は弟ではなく姉の方なのだ対象は解釈した。

「そうなのか?」

その質問はふたりに対してではなく、明確に供花に向けられた。慶長が横から答えてしまつてさらになにか勘ぐられてしまうのは明確だった。慶長は口を噤んだ。

供花は精一杯の、恥ずかし混じりの困り顔をつくった。

「私が、彼氏を連れてきたいって言ったらちよつと……………」

「ああ、なるほど。納得」

大将は手のひらを拳で打ち、驚くほど素直に納得した。

「たしかに彼は君たちを溺愛してるものな」

姉弟は両親とその席で過ごした時間を鮮明に思い出した。

太陽のような母。月のような父。深いところでつながっているふたりが大好きだったことを、ふたりは思い出す。涙は出なかった。そんな権利を自分たちが持っていないことを理解しているから。そして、母を亡くした後の父に、自分たちが何をされたのかをはっきりと覚えているから。そして、それを理由に逃げ出したのかも。

すべて——母が死に、その後の父が子どもに暴力を振れる人間になったこと——を言っ  
てしまおうかと考えた。しかし、結局そんな大それたことはできなかった。そんなことをして  
もやさしかった頃の父しか知らないふたりを悲しませてしまっただけだと理解していた。

翌朝まで過ごす予定だった伊豆をその日のうちに離れたのは、罪悪感から逃げるためだった。

× × ×

一気に九州まで走り抜けてしまおうかと当初こそ考えていたが、ふたりはせっかくだから思  
い出深い場所やこれまでにいつか行こうと話していた場所をすべて踏破してしまおうという結  
論にいきついた。ふたりは最後の旅行のつもりでいた。

伊豆半島を出ると、まずは富士山麓に向かった。海を見たのならば山を拝みたいというのが  
姉弟共通の心理だった。

青空に映える富士山を見ながら、車は走る。新富士17で下道に下り、富士宮で焼きそばを食  
べ、浅間大社を観光した。ガソリンを満タンにし、憂いなくひたすらに139号線を走った。渋  
滞はなく、十四時には本栖湖畔に着いた。

「いいかぜ」

「だね、ここで昼寝したい」

夏の湖畔は風が心地よく、またそこから見える富士はよく青空に映えていた。

ふたりはしばし閑談したが、陽が傾いて富士山に姿を隠そうとする時間になると隣の精進湖  
に移った。その晩は精進湖畔に一泊した。車中泊をした。二度目の車中泊だった。一度目は騒  
がしかったが、今回は終始静かなまま朝を迎えた。

いつの日かの楽しい思い出にはもう二度と触れられないのだと思うと、涙が出そうになった。

× × ×

翌日、朝食を食べずに和歌山の丹生都比売神社を目指した。

朝食は食わず、早めの昼食を浜松で食した。金の心配をする必要がなくなったふたりは浜松  
でうなぎを食べた。あまりにもおいしく、異なる店で、計二度食した。それぞれの店でたれも  
焼き方も異なり、うな重の奥行にうなった。

腹を膨らませて浜松を発ったが、名古屋を抜けて三重に入る頃には夕飯の話をし始めた。

「夕飯、どうする？」

話を振ったのは慶長だった。四百キロ超の運転による疲労の色が顔に出ていた。

「まだあのお蕎麦屋さんがあれば行きたいけどね」

「さすがにもうないんじゃない？」

「……ん〜」

喉を鳴らすように言いながら、供花が調べる。画面をさわる指が止まり、彼女は残念がった。

「あー……休業中、だって」

「それは残念だな……」

「……でも、行ってみない？」

「神社に近いし、そのつもり」

すぐに出た快諾は負い目がゆえに出た提案に対するものだ。

十六時手前に目的の場所に着いた。

蕎麦屋はやはり休業中だった。しかも、張り紙に書かれた休業の理由は店主の体調不良とあり、休業とはしているがそのまま閉店する可能性が高いともあった。

それを見てもふたりはあまり肩を落とさなかった。むしろ、両者とも内心では安心した。かつての楽しい記憶を思い出さなくて済むからだだった。

緑の中に映える丹生都比売神社の朱色と、和歌山に向かう途中に予約した宿屋はそんなふたりを静かに迎え入れた。

× × ×

丹生都比売神社の次は世屋姫神社へと向かった。太平洋側から日本海側への移動である。朝食は宿で食した。人の多い大阪では昼食を摂らず、綾部市内のラーメン屋で遅めの昼食を摂った。クセのつよいおいに顔をしかめたが、不思議とおいしかった。

ラジオは意図して流さなかった。だから、供花が寝ると車内はずかになった。

姉がすっかり寝付いているのを横目に確認し、弟は表情を暗くした。後悔ではなく、不透明さがそうさせた。重いため息を吐きかけ、口をつぐんでそれを呑み込む。

「どうなるのかな」

おわりを想像しながら、ほとんど確信しながら、言葉がこぼれた。彼は見てみぬふりをしてる。そうしていることから必死に目を逸らしている。

一七八号線から逸れ、坂道を上り始めると、すぐに目的の場所に着いた。そこは記憶とほとんど変わっていなかった。青々とした棚田が広がり、その中にひっそりと鳥居があった。

「着いたよ」

やさしく言って揺するが、供花は起きなかった。迷ったが、結局慶長は車を寄せて停め、ひとり神社に向かった。日差しは熱く、汗も噴き出たが、風が心地よく、また牧歌的な風景は顔を暗くしていたものをいくらか取り除いた。

× × ×

宮津市から糸島市への移動は二日に及んだ。距離にして七〇〇キロ超だった。その間、パトカーをよく見かけた。検問にからなかったのはただただ運がよかったとしか言いようがなかった。だから、大入海岸の遠浅の海を見た瞬間の喜びは大きかった。

「うみだ〜〜!!!」

「本当に来れた……!!」

普段は冷静な慶長が叫び、騒がしい供花が嘔みしめた。姉弟と言えども、感情の出し方はまったく違った。跳ねる水で服が濡れるのをまったく気にせず波打ち際にまで駆ける弟に、姉が何か言おうと口を開いたが、結局笑ってその様子をながめた。年甲斐もなく水辺で楽しそうにする弟に向けられる姉の視線にはもの哀しさと諦念と申し訳なさとおおしさがあった。

ふたりはやがて並ぶと、一緒に砂浜を端から端まで歩いた。ひと言も言葉は発されず、波音がふたりの間を満たした。砂浜を歩きつくしたふたりは大きな石が積み重ねられてできた岬の先に立った。振り返るとさっきまで歩いてきた白い砂浜が見えた。

きれいだ、とも言おうとしたそれぞれの口は、しかしその感想を発さなかった。そこからは道路も見えた。砂浜からでは木々に隠れて見えなかったそこに、パトカーが走り去るのを見た。ふたりは息を飲み、喜びを忘れた。夢から現実に引き戻されたような感覚があった。

ぽつりと冷静に、供花が言った。

「ここからは車、置いていこう」

「……そうだな」

冷水を急にかけられたようなふたりは車に戻らずに最寄りの無人駅に向かった。誰もいないホームの椅子に足を投げ出すようにして座り、ふたりは蝉の鳴き声をBGMにあっけらかんとした様子で会話する。

「ここまで来ておいてなんだけどき、どうする？ このあと」

「私は、もう疲れたよ。生きてはいけない」

「そっか。じゃあ予定通りに、島で死のうか」

捕まるのは時間の問題であることは分かってきている。そして、そうだったが最後、まともな人生が歩めないことも理解している。そうであるのならおわることを選ぶのがふたりの共通する価値観だった。ふたりは共依存していた。

まばゆい夏空を見上げながら、姉は弟に訊いた。

「なんで、たのしくいられなかったんだろう」

「……………」

「ねえ、なんでなんだと思う？ 慶長」

「あの男が、母さんを愛し過ぎていたからか、死を受け入れられるほど強くなかったから」

「そっかあ……」

供花はここから納得して受け入れた。

「俺がここまで来たのも、同じような理由だけだね」

「……それはうれしいなあ」

「でもさ、ごめんね」

供花は俯き、慶長はその横顔につよく言う。

「やめろ。謝るなよ」

「でも、謝りたくもなるよ」

「今、俺が生きているのは姉さんのおかげで、それを踏まえれば当たり前のことなんだよ」  
踏切の音がやがて鳴り始める。トンネルの暗がりに電車の明かりが見えた。

慶長は立ち上がり、ぐつと上に伸びをした。清々しい表情だった。

「ほら、立って。行こうよ」

「……うん、ありがと」

姉は弟の手を取らずに自分で立つ。弟はわずかに眉を動かした。

姉は弟に先んじて点字ブロックの前に立った。そして振り返らずにぼつりと言う。

「島、きれいかな」

「きれいだよ。きつと」

電車がふたりの前に停まるも、すぐにドアは開かなかった。姉が首を傾げ、弟はすこし笑ってドア横のボタンを押してドアを開けた。電車のドアは自動ではなく、押しボタン式だった。

供花は花のように笑い、慶長は木漏れ日のように微笑んだ。

× × ×

加川栄一は自身が初めて関わる事件がこんなものになるとは露ほども考えていなかった。小さな頃から不思議と警察官への憧れを持っていた彼が最初に関わったのは、高い社会的地位を持つ暴力的な父を殺害した姉弟が警察の手を逃れて自殺した事件だった。

目撃情報を得て一番に現場に向かった彼は生きたふたりを見なかった。現場は島の人間もほとんど近寄らない場所にある古く小さな神社だった。そこは海沿いで、高台で、景色が良かった。近場に車両を停めてそこへ向かうと、崖沿いに少ない荷物と靴が二足あった。

そして、崖下を覗く前から、なるほど、と納得した。二足の靴が並んでいるのを見て、追ってきた姉弟の末路を悟った。

それからしばらくの間、その事件についてよく報道された。しばらくと言っても一週間程度だったが、姉のために社会的地位と命を捨てた弟の愛情はいくらかの人々に感銘を与えたかもしれなかった。

一ヶ月もすると、無償の愛がゆえのひとつの結果は多くの人の記憶から失われた。